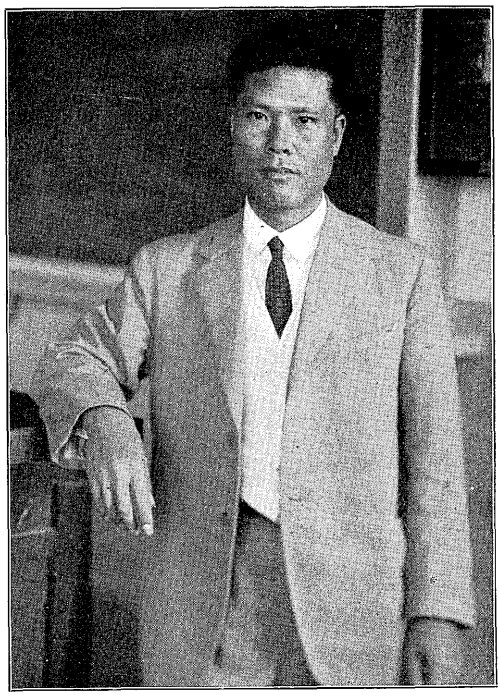
ガ詰ッテてんぽつき或ハてんぽこき(虚言ヲ云フ人)ナド、申シマス、此ノてんぽニ就キテ私ニ一案アルノデス、モダン人ニハ餘リ使ハレマセンガ我國語ニけんぼト云フ言葉ガアリマス、是レハ眞或ハ正シキノ意味カト思ヒマス、是レガてんぽニ訛ッタモノト解釋シタイノデス、實際東北ニハてんぽなしト稱スル人モアリマスガ多數ハけんぽなしト申シテ居リマス、ソレデけんぽなしノ意味ハ眞事デナキ梨ト云フ事ヲ詰メタモノト解釋シタイノデス、鄉里方言ニ就イテ考ヘタ事ガアリマシタノヲ思出シマシテ一興ニ供ヘマシタ次第デス

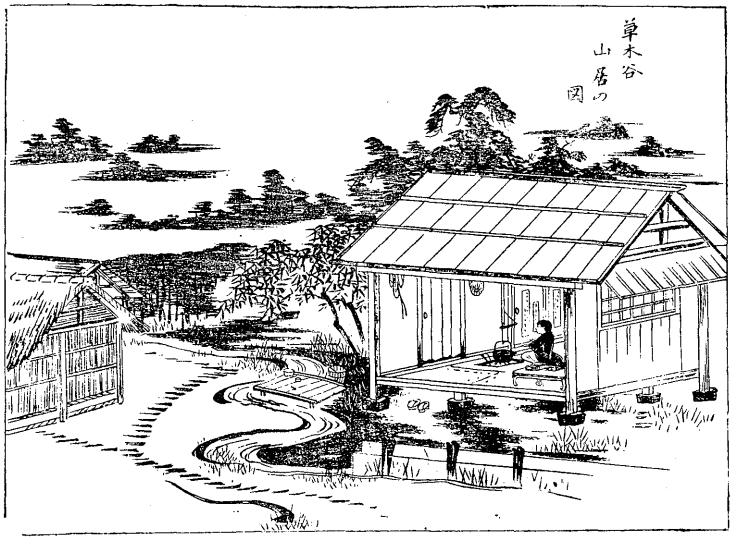


村松七郎君（秋田縣師範學校）
（昭和五年十月十二日撮影）

○石川理紀之助翁『救荒食圖解』ニ就テノ記

秋田縣師範學校　村松七郎

石川理紀之助翁ハ弘化二年二月二十五日羽後國秋田郡小泉村奈良周次郎三男ニ生レ後石川家ヲ繼ギ大正四年九月七十一歳ヲ以テ病ヲ得南秋田郡山田村ニ長逝サレタ、翁ハ天下ノ老農トシテ主トシテ農村經濟ノ方面ニ全力ヲ傾注シ奥羽諸國ハ勿論九州鹿兒島宮崎ノ諸縣ヲ始メ廣ク諸地方ニ赴カレ農村救濟ノタメ奔走、世ヲ去ルマデ寧日ナキ活動的生涯デアッタ



羽後草木谷ノ山居（『草木谷庵の手鍋』所載）　石川理紀之助氏此山居ニテ山野ノ木實草根ヲ研究シ之レヲ編ンデ一小册子トナシ『草木谷庵の手鍋』ト題シ明治三十一年二月二十二日ニ之レヲ世ニ公ニシタ

翁ハ文學ヲヨクシ著述ハ等身トイフベク八百七十一册ニ上ッタ、和歌ニ最モ秀デ高崎正風氏ニ知ラレ此ノ方面ニモ大イニ有名ナリシ人デアル

翁嘗テ明治二十二年四十五歳ノ時草木谷ト稱スル山谷ニ獨居シ同三十一年山居小屋燒失スルマデ十年間貧民生活ノ研究ト體驗トヲナシ、殆ンド無一物ヨリ始メテ經濟的確立ヲ行ヒ農村經濟ノ立行カザルナキヲ立證セラレタルハ有名ナル事實ナリ、此ノ間常ニ山野天生ノ雜草ヲ利用シ自ラ食用ヲ試ミ又人ニ之レヲ傳ヘタリ、是レ秋田ハ古來キカツ（飢饉）多ク古ニ於テハ之レガタメ多數ノ死者ヲ出セル苦キ經驗ヨリ此ノ救荒的方面ニ大イニ考慮セラレタル所以ニシテ山居中ノ該實驗等ハ翁ノ著『庵の手鍋』ニ詳カデアル

次ニ述ベントスルハ序ニアル通リ縣廳ヨリノ委囑ヲ受ケタル際ノ調査報告ノ一部ニシテ『救荒食圖解』ハ『救荒策』ト稱スル三本中ノ一本ニシテ二册ハ救荒策ヲ講ゼラレタルモノデアル、本書ハ色彩ヲ施シアル古書式ノ圖ニシテ大體判明スルケレ共多クハ萠芽時代ヲ食用ニ供スル故多少難解ノモノアレ共各地ヲ調査シ註解ヲ

加ヘタルナリ、茲ニハ右ノ圖ハ省略シタリ（タゞ例トシテ其中ノ數圖ヲ寫眞ニ撮リ下ニ掲ゲタ）

『救荒食圖解』

序

昨明治三十年蟲害ニ罹リ不作ノタメ山間村落大ニ窮迫シテイマダ積雪中ヨリ蕨ノ根ヲ堀リ飢ヲ凌グ者多シソレガ救濟策ヲ講センコトハ縣廳ヨリ囑託セラレ雄（雄勝）平（平鹿）仙（仙北）由（由利）ノ四郡ヲ巡回シテ山野沼澤ニアル處ノ食物トナルベキ物ヲトリ其ノ調理法ヲ教ヘタルヲ伊藤永助氏ガ模寫シタルニ簡單ニ說明ヲ附シテ一小冊トシ名ヅケテ救荒食圖解トイフ

明治三十一年五月　石川理紀之助

【村松註】前述ノ如ク右書中ニ在ル多數ノ圖中其七種ヲ抄出撮影シ此ニ挿入シタ（但シ縮圖）

一、蕗の薹（中草）三四月の頃花葉を去りてゆがきて食す山の崩れたる跡又は山の斜地等に生ず

又はっかい

【村松註】ふきのばっけ（蕗ノ化物ノ意）トモ稱シ一尺內外ニ伸長スルマデ採リ用フ

二、こごめ（中草）四五月の頃澤地又は山岸等に生ずゆがきて和物等に用ふ

【村松註】くさそてデ又こゞみトモイフ、鳥海山ニテハおくやまわらびヲモこゞめト稱シ食ス

三、薊（大草）野澤に多く生ず其種類數あり鬼薊といふ尖の生じたるは食されず三四月生ずゆがきて食す

【村松註】圖ニヨレバ鋸刻多シ澤薊ナラン本地方テハ早春なんぶあざみ、さはあざみ最多ク食用トサル

四、土筆（小草）つく〳〵し又名つくへ　三四月頃花と袴とを去り莖を食す　ゆがき醬油にひたしてよし澤地に生ず【村松註】方言へびのまくら、かもぐさ、へびのかもこ、すぎかのか、ぢくべ等

五、うど（大草）山谷に生ず四五月の頃莖の堅くならぬ內は白莖をそへて食ふ

閉ヘ伊い牛この舌した

六、閉伊牛の舌(大草)　澤地に生じ莖太し四五月の頃ゆがきて食す五月中旬開花すれば葉少し剛し五月中旬花盛也花の傍に白き葉一枚生ず此地小さし葉五六寸のもの也

【村松註】圖ニヨレバ明カニみづばせうデアル、縣下ニ於テ本品ノ食用ヲ殆ンド聞カズ、只仙北郡荒川村上淀川地方ニ於テ食用トスル事實ヲ知リ得タノミデアル

七、ほん菜(中草)　四五月の頃食す山澤の岸に多く生ず莖白く且赤し　ゆがきて食す

【村松註】早春當地ニ出ヅルほん菜ニ二種アリ、一ヲ上ほんなト稱シよぶすまさうヲイヒ一ヲうしほんなトイヒたまぶき卽テ方言けぼんな又ねこぼんなノ嫩芽ヲ稱ス前者ヲ上品トス

【村松註】當地ニ於テハうんどん又うどんト稱シ山野ヨリ採リ來リテ大イニ用フ

大三ツ葉

八、大三葉(中草)　澤地に生ず莖を食す四五月の頃花さく實も食ふ甘し

【村松註】　えんれいさうヲイフ又山みつばトモイフ、羽後矢島邊デハ此實ヲ食レバ長生スルトイフ

九　くわん草(中草)　ワスレグサ、平鹿に　かこじともいふ莖葉とも食ふ(四五月頃)又は米の粥に入れて最よし澤地畦畔等に生ず

【村松註】　方言かんぺろ、ぴぴ、くわんちょ等デやぶかんざうヲ指ス花ハユガキテ醤油ニテ食ス

一〇、野ひる(中草)　仙北生保内邊に狐ひるともいふ雄勝にはあさつきひるともいふ雄平仙三郡共畑に自生して恰かも栽培したるが如し、平年には融雪の際根をとり食ふ葉青色になれば五月頃食す田植頃に至れば根に味噌を付て食ふといふ青菜ともゆがき醤油をつけて食ふか又よく煮て米の粥にするか又は雜煮にするは最もよし

【村松註】　當地一般ニ用フ北秋田郡ニ於テ、たまびろ又ハたまびる又ハひろこトイフ

一一、かたこ(中草)　平鹿の山地谷地に多し稀に葉に星なきものあり四五月の頃莖葉共食す山の斜地等に自生す

【村松註】　かたくりヲイフ、味極メテ良ク花ノ咲ク頃ニ採リ來リ花ヲ除キテユガキテ食ス

一二、岩たら(中草)　平鹿山内村邊に多し四五月頃莖葉共に食す常に和物等に用ふ、ゆがき干して蓄ふ山の斜地萱山等の地にあり生立鳥の足に似て莖太し、しとけ位の太さなり

【村松註】　やまぶきしょうま　岩上ニ生ズルたらのきト稱スル意ニテ宛カモたらのきノ嫩芽ノ如ク又味モ大イニ似テ美味ナリ、色茶褐色毛茸アリ山村ニ於テ一般用ヒラレ秋田市等ニモ時々生ヅルコトアリ

一三、ぜんまい(中草)　山谷又は野山の斜地に多く生ずゆがきて干して食ふ四五月の頃盛なり

【村松註】　食用外ノ利用トシテぜんまいノ毛茸ヲトリ集メテ絲ニ繰リテ織物トナス由利郡龜田町ノ特産

ぜんまい織

一四、山牛蒡(中草)　山谷斜地に多く生ず灰水にて煮て搗きて餅となし米の粉等を入れて食す三四月頃より採集す

【村松註】　おやまぼくち幷ニはばやまぼくちノ兩者ヲイフ

一五、桵の木の芽(中木)　四五月の頃いまだ葉の綻びざる芽を和物等にして食す山崩等の地に多く生ず

【村松註】　たらのきノ芽ノ美味ナルハ周知ノ事實

一六、木通の芽(蔓草)　三四月の頃いまだ花のさかぬ内にゆがきて食ふ

【村松註】　方言あきみ、あきび、あくび卽テみつばあけびノ嫩芽ヲイフ之レヲきのめ又はきのもえ又はてなト稱スユガキ干シテ貯フル地方アリト、本地方ニハ吾人ノ通稱スルあけびハナシ

一七、うは百合

【村松註】　當地産ハおほうばゆりナリ高サ四五尺ニナルモノアリ、花ハ十二三輪ヲツク

一八、衣菜(小草)　一名坊主衣、野澤の岸等ニ多く生ずゆがき又は和物にして四五月の頃食す

【村松註】　こうぞりなヲ稱ス、方言ころもな又はうまのごはんトイフ

一九、山にんじん(中草)　南秋田たないしろ　横手山内せくせり又あははれこ　屑捨場等の土の肥たる地に多く生ず春消雪すれば諸草に先ちて葉を開く、平常葉を去り淺漬等にして葉莖軟かにして食ひやすし

【村松註】　しゃくヲ指ス

二〇、小豆菜(中草)　平鹿山内にあり川原等の砂地に多く根茂り株立となりて生ず莖を生にてかめば小豆の匂ひす四五月採りゆがき干して貯ふ又直ちにゆがきて食す

【村松註】　平鹿地方ノミナラズ廣ク用ユ本品ハ荳科ノえびらふぢ

二一、油こゝめ(中草)　增田山内に多し道路堰の岸等に多し莖薄赤く和か也四五月の頃食すべしゆがきて用ふ少し油氣あり

【村松註】　羊齒ナルハ圖ニヨリテモ明ナレ共如何ナルモノナルカ不明

二二、蓬(大草)　山野に多く生ず灰汁をさして煮て多く餅にする也救莖には根花等に交へて食す四五月頃最もよし

二三、げんのしゃうこ【村松註】方言よがのはし(夜蚊ノ嘴ノ意、果實ガ似ル)又いしゃいらず、いしゃころし、せきりぐさノ名モアル

二四、鳥の足(中草)　四五月の頃食す山澤の岸斜地に多く生じて岩たらに似て枝の付き鳥の足の如し岩たらより細く莖に毛あり此草に花さけば蕨粉なしといふ

【村松註】　とりあししょうまヲイフ軟カニシテ味ヨシ

鳥　の　足

唐　牛　房

二五、三ッ葉(小草)

二六、かさの花　五月中旬よりひらく

【村松註】　たにうつぎヲイフ、又がさ、がんぢゃのき、かささ、いはしばな等ノ方言ガアル

二七、香茸

二八、椎茸

二九、和大黄(大草)　又しのは　諸草に先ち消雪を待ちて發生す澤地道路に多く生じてひたしにして用ふれば珍重なるものなり蕗の薹等皆同時に出る春草の初なり若きものに粘ありて長し多く食すれば下痢すといへり

【村松註】　ぎしぎしヲイフ、しのべ、うまのしりぬぐひ等ノ方言ガアル

三〇、唐牛蒡(大草)　四五月の頃より發生し其の葉を食ふ葉五六月に至れば充分に茂り平常これを掻きとりて汁の實とす垣根又は水屋尻等の土の肥たる地に植付くこと多し

【村松註】　南陸科ノやまごぼうヲ指スとごぼ又ハとごぼうト俗稱ス

三一、もうせん(中草)　雄勝に　もへ　といふ四五月の頃食す垣根又は肥たる地に多く生ず

【村松註】　圖ニヨリテ見レバ明カニかさどほし(唇形科)デアル、方言ハへびのかんこばな、けぁいどしんじ等デアル

三二、うるい

【村松註】　みづきばうしヲ指ス、ぎはうしノ類ハ方言やちうり、うり、やまうり等デアル

三三、竹の子(中品)　笹竹は四月頃李の花の盛なる頃竹の大なる物は次第に遲く熊竹になれば田植頃に出る也ゆがきて用ふ

【村松註】　笹竹トアルハ筍極メテ小ニシテ小筆ノ軸位ノ大サ、熊竹ハねまがりだけヲイヒ其筍ハ一般ノ好ム所デアル、ソノ他本地方産ノ筍ナシ

三四、虎杖(大草)　四五月頃より食用となる深山に多し平常にも鹽漬として用ふ

【村松註】　いたどりヲイフ又おほいたどり多シ、方言さしどり、どんがら、とがらんぼ、させどり、さす、ねんぼ等

三五、布葉　本名沙參(小草)　山野に生じ五月頃摘採してゆがきて干して用ゆ、根は大根の如き形にして小也食すべし

【村松註】　つりがねにんじんヲイフ、方言ぬのば、ののば等

三六、蕨及根(中草)　生蕨をゆがき干して食する時に更に煮て用ふるもの矢島在に多し四五月頃生ず野山及小柴立等に多しゆがきて食ふ根は秋八月より翌六月頃まで堀取りて澱粉を製して食ふ其後粉少し

三七、胡桃の芽(大木)　宅地添又は畑添等の地に栽植す四五月頃芽を食す五月十日頃より花咲く

三八、漆の芽(中木)　山野生又は畑宅地畦畔等に栽植す四五月頃、漆汁に負くる者は食し難し

三九、すかとり(中草)　四五月の頃平素兒等莖に鹽を付けて食ふ少し酸味あり道傍畑添等に多く生ず

【村松註】　すいばヲ指ス、方言しかんこ、すかな、しかな、すかんぽ、嫩芽ヲすかゝゝ、しこゝゝ

四〇、薑菜(小草)　消雪すれば生じて諸草に先立三四月の頃より花咲き土手又は木陰等山中或ハ道傍等に多し

【村松註】　すみれヲイフ

四一、にほ草(中草)　横手山内に　さくといふ雄勝山田邊　まつかさく　谷間の澤地に多く生ず葉の廣き大草也生にて皮を去り食ふ

【村松註】　はなうどヲイフ、生ノマヽ、小兒等ハ皮ヲ剝デ食ス厥ラシイ臭殆ンドナシ

四二、蕗

四三、こめの子木（小木）　小林の中に生ず四五月の頃芽を食ふゆがき干して平素にも和物等に用ふる也五月に至れば白き花咲く木の名を串木といふ魚をあぶる串に用ふ

【村松註】　みつばうつぎヲイフ、方言こめのご、こめのき

こめの子木

四四、椿

四五、鹽手（中草）　山路の傍等の藪に多く生ぜり舊五月節句に耳をかくを例とすひたし等にして食す最も上品の物也四五月の頃よく生ずるなり

【村松註】　しょでこ、しゅんでこ、ひでこト稱スこハ語尾ニ付スル習慣ナリ、早春出ヅル野生蔬菜トシテハ上品ノモノナリ

四六、谷地蕗（小草）　四五月頃澤地に多く生ず葉和かにしてひたしとするによし五月中旬に至れば黄色なる花咲く

【村松註】　さはをぐるま

四七、うるい（中草）　又南秋田馬場目には谷地うりといふ三四月の頃多く澤地に生じて葉大にして筋高し莖の白き處ひたし又は漬物にすれば蕪の莖の如く味よし

【村松註】　たうぎぼうし及ぎばうしヲ含メテ呼ブ

四八、たんぽぽ（小草）　山野に生じ又は土手川岸等に生ぜり平素和物等にして食せり四五月の頃盛なり五月中

旬には花開く

四九、あまどころ【村松註】おほあまどころガ多イ

五〇、はかい【村松註】不明

五一、志とけ(中草)　三四月盛なり五月に至りても猶食す小林に生ず溪間の斜地等に多し又栽培してもよく繁茂するものなり平素上品なる漬物とす

【村松註】しどぎ、しどけ、しんどけ等ト稱ス菊科ノもみぢがさヲ指ス食味極メテ上等

五二、あゐの子(中草)　すべて志とけの生ずる處に多し莖に少し毛あり薄赤し採取期は志どけに同じ上品の青物とす

【村松註】あいこ又ハあい、あえト云フみやまいらくさヲ稱ス、食味上等

五三、みづ(中草)　五六月頃より生じて初冬まで食す溪間の濕地岩隙等に生じて日の當らぬ處を好む平素農家の菜とす汁その他生なるをたゝき粘氣を出して味噌和にしミヅタヽキ等をなす

【村松註】うはばみさうヲイフ方言へびくさ、じゃぐさ、一般農家ガ秋マデ食用トシ又冬ノ料トシテ貯藏スルモノトシテ量ヨリ見テ食用雜草中第一ノモノ

五四、川原麻　雄勝仙道(中草)　川原ノ藪立等に多し其他山岸等にあり麻の葉に似たりゆがきて干し汁の實等に用ふ五月採取

(附)此川原麻を川邊郡和田邊には川原絲(かはらいと)といふ若き時上の方の葉を摘みとり干し置きて汁の實に用ふ又柔かなる莖をとりて汁又は貝燒等に煮て食す原野の藪中等に多く發生するものなり　(佐々木茂助)

【村松註】はんごんさうヲイフ、方言いとな、やまいと、やじあざみ、へびあさ、へびあんさい等ト稱ス、本種ノ葉ガ麻ノ葉ニ似ル故是等ノ俗稱ガ生ジタモノデアル

みづ

菜（な）　瓢（ふくべ）

五五、さいかちの芽（大木）　屋布添等にあり五月頃盛なりゆがきて用ひ平素にも和物等になすものなり

五六、せり（中草）　四五月頃葉を食ふ秋日根を食ふ澤水に生ず

【村松註】　せりノ根ヲ食スルハ當地一般ナリ

五七、山椒の芽（中木）　三四月頃生ずる芽を食ふゆがきて食用とす

五八、苧　からむし（大草）　三四月の頃生ず畑に作り糸を製するなり

五九、まるきの葉（小草）　三四月頃生ず道傍に多し

【村松註】　おほばこ、方言まくりっぱ、ちょれっぱ、びっきのは、ちょちょれこ、まるこっぱ、にす

六〇、はこべ（蔓草）　四五月頃土の肥たる處垣根又は畑添等に生ず　【村松註】　方言　あさしらげ　あさしらぎ

六一、細辛　【村松註】うすばさいしんヲイフ

六二、掣のごき(中草)　四五月頃莖を食す(ゆがき)畦畔の斜地に生ず綠色のものもあり又全體青色のものもあり山田村に　このてといふ青色の種類也

【村松註】方言むこのごし、このて、むこかさ、さるかさト稱シやぐるまさうヲ指ス

六三、瓢菜(フクベナ)(中草)　四五月の頃ひたし等にして食すかぶとぎくに似て小なり白き花五月中旬ひらく莖を食ふ筐子)畦畔等の斜地に多し

【村松註】毛茛科ノにりんさうナリ、ふくべなハ方言デアル

六四、山百合(中草)　五月中旬採る山野に多し煮て飯に交へて食す白き花咲く

【村松註】やまゆり相當一般食用トス

六五、もこら

【村松註】ひめねずねナリ、野ニ古老アリ本品ヲ示シテ食スベキヤヲ問フニ「コレハあまどころト稱シ昔ノキカツ(飢饉)ニハ根ヲ掘リテ食セリ今ハ用ヒズ」ト

六六、道しば

【村松註】みちやなぎ、毛馬内地方デハ食用トスルトイフ

六七、もっきんの萠(小木)　垣根に作る花から葵の花に似て小也白赤又はさし入れ等種々あり四月頃萠を食せり

【村松註】木槿即チむくげ、方言はちす、もんき

六八、石蕗(チハブキ)(中草)　庭草なり山蕗に似て葉厚し山野にあるを見ず

【村松註】つはぶき　本地方ニハ自生ナシ

(終リ)

食用トナルベキ植物【村松云フ、『救荒食圖解』中ノモノヲ除キ主トシテ石川翁ノ『草木谷庵の手鍋』ヨリ抄出】

一、木の萠芽類

うこぎノ萠【村松云フ、ひめうこぎヲ主トス、ひめうこぎハ一般生垣トナシ居ルモノ】

くこノ萠、けんぽなしノ萠、ぞうみノ萠【村松云フ、がまずみヲイフ】

ねむのきノ萠、ゑんじゅノ萠、とりとまらずノ萠、柏ノ葉

二、草　本

よめな、やつけら【村松云フ、だいもんじさうヲイフ貝燒ニヨロシ】、おみなへし、あかざノ葉　どんふりノ葉【村松云フ、どんふりトハいきゞヲイフ實ヲモ食ス】、にがな、ぼうふ、桔梗ノ萠、みそはぎ、みこしぐさ、ほど、すゑかづら【村松云フ、すひかづら】、ところ、もごら、いそろ、濱よもぎ、菊いも、山の芋、鍬たいな、しへらへろ、蒲ノ筍、蒜ノ筍、あしのつの、のこぎりさう、かっぱのごき【村松云フ、ひつじぐさ】、かと【村松云フ、河骨】

三、ソノ他

こくわ【村松云フ、しらくちづるノ實】、こはぜ【村松云フ、なつはぜノ實】、かまつかノ實、まつぶさノ實、またたびノ實、ひしノ實、ぶな栗、やまだぶうノ實、じゃうみノ實【村松云フ、がまずみノ實】、はしばみノ實、そばノ花、萱草ノ花、あかざ、大小豆ノ葉、馬鈴薯ノ葉、とちノ實、楢ノ實、さなづら【村松云フ、さんかくづるノ實】、紅花ノ嫩葉、ちゝこ、蕈菜、紫蘇殻、【村松云フ、りうきんくわノ莖葉ヲ食ス美味ナリ、實驗】

「味よきは飽くこと易しなか〳〵に味なきものゝ味をこそ知れ」「眞味却在無味」

救荒食調理法ノ一例『草木谷庵の手鍋』ヨリ

一、河骨（かわほね）　河骨は池溜に多し掘取り能く洗ひ灰水にて煮て米の白水にて氣出して糧とすべし又は生にて鹽付の香物等にするもよし予が幼年の頃窮民の初秋香物に河骨を鹽付にしてじゃうみ（赤キ實）【松村云ヲがまずみ】の色付たるを合して河骨の赤漬を常に食せり

二、もごら【村松云ヲ、ひめゐずゐノ方言】此草は濱邊の砂地等に多くあり大饉の年には大にこれを以て人の助かりたるよし　砂地の荒れ畑には澤山生ずるものにて莖薄赤く實圓く黒し其の根を掘りて食ふ其形回り四五分の物多く色白く毛あり其毛を去り細に刻み一夜水に浸して飯に焚き込み又は根斗りを餅に搗きて食するなり

三、いそろ【村松云ヲ、あをやぎさう】いそろは濱邊に多し最も南秋田郡男鹿島北磯村々の濱邊の野山に多しこれも大饉の年大に漁民の助となりしよし葉は一枚葉にして心高く花細かにして薄黒色のものなり其根の形葱の如しこれを煮て搗き餅として食ふ

四、蕎麥の花　蕎麥の花は散らぬものなれば收穫の時吹き分け當座食するには煮て氣出して炊きたる飯に上げてうむらし交へ食すべし久しく貯へ置には蒸して乾したるを俵に入れて貯へ置くべし

五、米の子木の芽　一名串木【村松云ヲ、みつばうつぎ】葉は卵木に少し似たり花は小滿の頃白く咲き卵木に似て粗なり一ト莖に三枚付て其三枚の葉を並べ合すれば隙なきものなり山の半腹に多く自生す串にするには二三年の木最よし能く割れる木なり又布葉と同じく常に和物にする爲に山間には年々芽を取りて乾し貯ふもの多し

○斷枝片葉（其五十）

牧野富太郎